



第2章 [実施報告]

2-1 事前研修

第1回 6月14日(土) 10:00-14:00 @JICA沖縄センター

主なプログラム	1.主催者挨拶 JICA沖縄 市民参加協力課長 木田 克人 2.アイスブレイク JOCA 3.オリエンテーション JOCA、JICA沖縄 市民参加協力課 田中 知恵 4.チームビルディング 5.昨年度参加者によるパラオ紹介
目的	①研修の概要、ゴールを理解する。 ②派遣国および海外研修について知り、事前準備の目途を付ける。 ③参加する教員同士のコミュニケーションが円滑に図れるようにする。 ④自分ならどうアレンジして教材を使用するかという視点を得る

本研修の趣旨やスケジュールの説明に加えて、参加教員のチームビルディングに繋がるようにプログラムを組んだ。

アイスブレイクで自己紹介や参加者の人となりを知ることによって緊張感が取れ、一年間共に学び合う関係づくりを行った。オリエンテーションでは本研修の主役は参加教員自身であることと、その自覚を持たせる問いかけを行った。

チームビルディングでは様々なアクティビティを用いて今後チームとして研修に取り組んでいく上で、自分がどう貢献できるのか、メンバー意識を作ることができた。

また、パラオ研修の事前学習として、昨年度の参加教員が4名集まり、スライドや動画などで昨年の研修の報告を行ってもらった。その後質疑応答にて当研修に参加することの心得や現地の学校の様子などを熱心に聞いていた。



主なプログラム	<ol style="list-style-type: none"> 1.主催者挨拶 JICA沖縄 市民参加協力課長 木田 克人 2.講義&ワークショップ「ファシリテーションとは」 宮道ファシリテーター事務所 宮道 喜一 氏 3.ワークショップ体験①「スマホから考える わたし・世界・SDGs」 JOCA (制作・発行：認定NPO法人開発教育協会〔DEAR〕、2024年改訂版) 4.ワークショップ体験②「沖縄がもし100人の村だったら」
目的	<ol style="list-style-type: none"> ①参加型手法についての基礎を理解する。 ②多様なワークショップの手法を知り、その効果や参加者の気持ちを体験する。 ③自分ならどうアレンジして教材を使用するかという視点を得る。

国際理解・開発教育指導者養成講座と合同で行った。多様な参加型手法のワークショップを体験することで、指導者自身が開発教育の面白さを知り、学校現場でどう活かすか考えることをねらいとしてプログラムを組んだ。

今回新たな試みとして『ファシリテーション』の視点を入れ、宮道ファシリテーター事務所の宮道氏に講義を依頼した。開発教育と社会参画が目指すところの共通点や参加型である意義、問いの大切さ等についての解説があった。

またファシリテーションについては「参加型に取り組む上での不安・懸念」について参加者同士の話し合いを通して、3つのデザイン（プロセスデザイン、場のデザイン、プログラムデザイン）の大切さや話し合いの進め方について講義があった。

ワークショップ体験では、身近なスマートフォンの製造工程や素材を取り巻く問題について考えるワークショップを体験した。フォトランゲージを通して写真の背景にある問題を想像することで普段使用しているモノが世界課題と繋がっていることを認識させ、振り返りでは「私に出来ること」について意見を共有した。ワークショップ後には、「どんな参加型手法が使われていたか」「生徒にどんな効果があるか」をグループ内で振り返りを行った。

二つ目のワークショップ体験では、『沖縄がもし100人の村だったら』（試作版）を実施した。沖縄がもし100人の村だったら「人口、しまくとぅば、産業、貧困」はそれぞれどのように割合として見えてくるのか、各テーマのワークの一部を役割になりきって体験した。ワークショップ後は良かった点と改善点を書き出し、各制作者へのフィードバックを行った。

教師海外研修の参加者6名も、今回の事前学習を通して、開発教育におけるファシリテーションの大事さと、教材開発の際のヒントを得る事が出来たことが伺えた。



<p>主なプログラム</p>	<p>1.ワークショップ体験① 「パラオから理想の社会づくりについて考える」 沖縄県立総合教育センター 平田 真弓 研究主事 2.ワークショップ体験② 「消滅危機言語」 桐朋女子中・高等学校 吉崎 亜由美 教諭 3.参加型教材作成の視点でワークショップを振り返る JOCA 4.ワークショップ体験③ 「10分ワークショップ紹介」 豊見城市立豊見城中学校 大城 真紀子 教諭</p>
<p>目的</p>	<p>①参加型ワークショップの手法を知り、その効果や参加者の気持ちを体験する。 ②県内の実践者の取組から、学級経営や時間割調整の知恵を学ぶ。 ③自分ならどうアレンジして教材を使用するかという視点を獲得。 ④10分ワークショップを体験し、ワークショップづくりに繋げる。</p>

第3回事前学習は授業で開発教育を取り入れている先生方にワークショップの実施および実践報告をしていただいた後、参加型教材作成の視点で各ワークショップを振り返りを行った。

平田主事より、2024年度教師海外研修パラオ派遣で訪問した視察先や出会った方々から得た情報をもとに教材作成したワークショップの実施及び実践報告を行った。パラオに住む様々な住民を想定した役割カードを用いてロールプレイを行い、「パラオの理想の社会づくり」について考えた。実際の授業展開ではワークショップ終了後に、「では、沖縄を理想の社会にするには？」と投げかけ実社会とリンクさせたと報告があった。

吉崎教諭による消滅危機言語のワークショップでは、資料や写真をもとにオーストラリアの先住民の言語が消滅危機言語になった理由や消滅危機言語と世界の自然遺産の分布に重なりがある理由などについて考え、グループ内で意見の共有を行った。消滅危機言語に対する異なった2つの意見について話し合う場面では、沖縄の「しまくとぅば」の現状とも重なり様々な意見が出ていた。教師海外研修の参加者からは「ぜひ子どもたちとも考えたい」や「どの科目で活用できるか検討して実践してみたい」などの感想があった。

今年度の国際理解教育指導者養成講座にて様々な参加型ワークショップを体験してきた参加者は、今後の教材づくりに進むにあたり、4つのワークショップを「参加型教材作成」の視点からどんな要素があったか振り返りを行った。「ねらいは何だったか」「どのような発問がされていたか」という問いに対してグループで話し合う中で、「自分が授業でやるならどう取り入れるか」というアイデアが出され、体験するだけでなく実際に学校で実践したいという意識につなげることができた。

最後に大城教諭より「10分ワークショップ」について、実際に授業の中で実施したワークショップ体験を交えながら、多忙なカリキュラムの隙間時間を使った実践方法や、教材作成の素材の探し方について説明があった。



2-2 海外研修スケジュール

※8/1～2と8/12は移動日

	日付	訪問先／内容	研修のねらい・ポイント
1	8/3 (日)	JICAパラオ事務所 ブリーフィング	パラオの課題やJICAパラオ事務所の取り組みおよびODAやNGOの支援について知る
		JICA海外協力隊との 意見交換会	パラオ在住のJICA海外協力隊と現地での生活や活動内容について意見交換をする
2	8/4 (月)	ニワール州エコツアー	マングローブおよび海洋環境保全の取り組みを学ぶ
		持続可能な観光開発 (PVA) JICA専門家	エコツアーやパラオ文化体験など、観光の多様化への取り組みを知る
3	8/5 (火)	パラオ国立博物館	パラオの先史時代から他国による統治時代、そして現在に至る歴史を資料や展示を通して学ぶ
		特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン	国際NGOピースウィンズ・ジャパンのパラオにおける活動を聞き、島しょ地域の医療課題について知る
		パラオ国ベラウ・ エコ・グラス・スタジオ	島しょ地域におけるリサイクルの方法や未活用資源を利用した商品開発から持続可能な産業開発を学ぶ
4	8/6 (水)	JICA海外協力隊 ジョブシャドウイング	パラオの学校で協力隊の活動を視察し、学校教育や支援の現状を知る。子供達に授業をし、協力隊の模擬体験をする
5	8/7 (木)	シニアシチズンセンター	日本や沖縄にゆかりのあるシニア世代から委任統治時代や終戦後の様子などのお話を聞く
		パラオ高校	パラオにおける中等教育の現状を知る 日本語を学ぶ高校生と交流する
		在パラオ日本国大使館	これまでの研修の報告と、日本国大使館の役割を理解する
6	8/8 (金)	日本地雷処理を支援する会 (JMAS)	海中に残置された爆雷の処理やコロール州政府レンジャーへの技術移転教育の現状を知る
		環境配慮型交通システム 整備プロジェクト	パラオにおける公共交通の実態と路線バスの運行を通じて車社会の課題解決の取り組みを知る
		太陽光蓄充電システム、電気 自動車脱炭素交通モデル	大分県の姫島で活用される技術を活用し、持続可能な観光開発と環境保全の両立を図る実証事業を学ぶ
7	8/9 (土)	ホームビジット	パラオの方と一日をともにし、現地の方の生活や習慣、価値観を知る
8	8/10 (日)	ペリリュー島	第二次世界大戦の戦跡視察。沖縄での地上戦との相違を知る
9	8/11 (月)	シャコ貝センター	沖縄出身の養殖の専門家から、海洋資源の保護及び有効活用の取り組みを学ぶ
		パラオ上院議員との 意見交換	沖縄にルーツを持つ議員とパラオの抱える課題と、より良い未来のためのビジョンなどについて意見交換をする

2-3 海外研修

DAY1 8月3日(日)

○JICAパラオ事務所

パラオでの研修内容が本格的にスタートした初日、JICAパラオ事務所にて井上企画調査員（ボランティア事業）を訪ねました。JICA海外協力隊員（ソロモン派遣）としてのご経験から、現在パラオに住むことになった経緯などを含む、井上さんのこれまでのご経歴を伺ったあと、パラオという国がこれまで歩んできた歴史を学ばせて頂きました。国として独立して約32年、それまでも現在も、様々な国々の支援によって支えられてきている国ということがわかりました。パラオ到着後、ホテルまで向かう道中で、街のあちこちに日本や台湾の国旗がある建物やインフラを目にし、その様子からも「支援されている国」という印象を強く受けました。私が現在勤務している宮古島も然り、パラオも海を活かした観光業が盛んですが、パラオ・プレッジ（入国時の環境保護誓約）を導入しているだけあって、環境保護に対する意識や啓発活動のレベルが非常に高いと感じました。研修場所が近くにある際は徒歩で向かうことも多かったのですが、町中の道路や公共施設などもとても綺麗でした。

地政学的な面では、パラオも沖縄と同じく地理的コーナーストーンであるが故に、ペリリュー島に米軍の滑走路が配備されている現実を知り、故郷の沖縄で起きていることと重なって心が苦しくなりました。この現状に対してパラオの方々、特にペリリュー島の島民の方々はどう感じているのか知りたと思いました。様々な研修場所へ赴く前に、パラオの前知識（地理・人口・歴史・国民性に関してなど）を知ることができて良かったです。（所感：具志堅）



○JICA海外協力隊との懇談会

パラオで海外協力隊をされている方々14名（分野は教育、管理栄養士、エコツーリズムなど様々）に来て頂き、協力隊の方々の日常や従事されている活動内容などについて伺うことができました。協力隊に応募するきっかけは様々だそうですが、皆さんそれぞれのフィールドで熱い思いを持っていました。パラオの小学校に勤務している先生は、日本で教員生活を終えた後、異国の地で再び教鞭を取っているとので、その姿を想像してとても刺激を受けました。沖縄、日本でもそうですがパラオも常に教員不足です。そのため教育の質や先生方の意識も課題に感じるものが多々あるそうです。どの業種に従事している方からも共通して挙げられていたことが、どこまで自分たちがボランティアとして介入していいのか、そもそもこれは介入すべきことなのか、といった葛藤でした。パラオでの物事のやり方、進め方をリスペクトしつつ、少しでも現状が改善できることがあれば、そのきっかけを作っているイメージで私は捉えました。真の国際協力、国際ボランティアとは、と原点に戻る疑問が湧いたのと同時に、その難しさや複雑さを感じました。パラオで活躍しているJICA海外協力隊の方々の姿を、帰国後ぜひ自分の生徒たちにも紹介しようと思いました。（所感：具志堅）



○ニワール州エコツアー

パラオ北東部にあるニワール州のエコツアーに参加しました。パラオ国際珊瑚礁センターとJICAの協力により完成したこのツアーは2025年1月から本格的に運営がスタートしたプログラムです。出発前にマングローブが生態系の中で重要な役割を担っていることやそこに生息する生物についての説明を受けた後、船に乗ってマングローブに囲まれた川をのぼったり、保護区であるオルスルケソル滝周辺の森を散策したりしました。パラオの巨大な木々に圧倒された私は「宮古島のマングローブと大きさを比較したときに、生徒達はどのような反応をするのだろうか？」と生徒達の探究する姿を思い浮かべ胸が高鳴りました。

もともと自然に手を加えることを好まないパラオの人々、さらに保護区である森林を開発していくことに反対する声もあった中で、このツアーを着工することはとても困難であったことを現地ガイドのアリーシャさんが教えてくれました。環境保護と経済発展のバランスを取ることはどこの地域であっても難しい課題であることを再確認しつつ、地元の人々をはじめパラオを訪れる人々が、この豊かで雄大な自然の美しさや尊さを実感・理解し、共に大切にしていける学びが今後ツアーを通して広がっていくことを願いました。

私たちのツアーに同行して下さったJICA海外協力隊の璃玉さんにも話を伺い、いずれは日本の支援なしでもパラオの方々が自分たちの手でツアーが運営できることがゴールであることを教えてくださいました。単に物質的な支援だけではなく、人と人とを繋ぎ1つの国を自立へと促して支援しているJICAの取り組みを肌で感じる事ができました。(所感：恩納)



○持続可能な観光開発 (PVA)

エコツアーを体験しパラオの自然の魅力を学んだ後、午後私たちはパラオの観光振興を担っているPalau Visitors Authority(PVA)の小野寺さん(JICA専門家)にお話を伺いました。パラオを訪れる観光客のほとんどがダイビングなどの海のレジャーを目的としていますが、PVAでは海の資源だけに頼らない観光業の発展を目指し、エコツアーや、パラオの文化にふれる観光資源のマーケティング・プロモーションを行っています。現在パラオの3つの州でそれぞれに根付いている文化や自然、神話などを活かしたツアーがお客様を受け入れる水準に達し、マーケティング・プロモーションを連携できるようになったそうです。環境・文化への保護意識が高いパラオの方々との信頼を築き、理解を深め、観光業の発展から国の自立へ。1つ1つの小さな取り組みが1つの国を支える大きな流れを生み出すことにつながっていくことを学ぶことができました。

2025年10月から日本とパラオをつなぐ直行便ができることもあり、「日本人の旅行者を増やし、なるべくロングステイしてもらうためにはどのような観光プランを提供する必要があるのか？」小野寺さんの取り組み事例を紹介してくださいました。日本修学旅行協会の冊子を通してパラオの認知度を上げることや、英語圏であり時差もない利点を生かしてホームステイ・ホームビジットの提案などを行い、実際に利用してくれる学校も少しずつ出てきているとのことでした。少しでも多くの日本人がパラオに興味・感心を持ちこの地に足を運び、先人達が築いてくれたこの国の人々との架け橋、繋がりを感じてもらえたらいいなと思いました。(所感：恩納)



○ペラウ国立博物館

ペラウ国立博物館を、JICA海外協力隊の伊藤さんの案内で見学しました。館内を回る中で強く感じたのは、文化・歴史・自然が、それぞれ別のものでなく、深くつながっているということです。まず自然があり、その中で人が生活し、その積み重ねが文化となって今に残っていることが、展示を通して伝わってきました。この考え方は特別支援学校の教育においても大切な視点であると感じました。知識を多く覚えることよりも、「人はどのように暮らしてきたのか」「なぜこの形や模様が生まれたのか」といったことを、生活と結びつけて考える学びにつながるからです。例えば、文字を持たなかったパラオの人々が、星を見て海を渡っていたことや、パラオの伝統的建築物アバイの壁画に意味のある模様を描いていたことは、知恵や大切なことを生活の中で伝えてきた例として紹介できます。地域の文化と比べながら、絵を描いたり、形をまねたりする活動と組み合わせることで、生徒が自分の感じたことを表現する学習につながれると考えました。



また、外来種の問題は、沖縄とも共通する点が多く、人の行動が自然にどのような影響を与えるのかを考えるきっかけになります。さらに、統治や戦争の歴史についても、「その時、人々はどう考え、どう行動したのか」を想像する学びとして扱えるかもしれないと感じました。館内を見学しながら、「この内容をどのように授業で伝えられるか」を考え続けました。今後は、生徒一人一人が世界の多様さを感じ、他者や自然との関わりについて考える力を育てていきたいです。（所感：宮里）

○特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン (PWJ)

パラオではPWJは2021年から支援活動を続けており、今回の研修では現地でのどのような取り組みが行われているのかを詳しく知ることができました。

パラオで主に実施されているのは「検診」です。現地の看護学生などを検診の現場に連れていき、検診運営に参加し現場を経験させることで、地域の医療を支える人材を育てることに力を入れていました。単に医療を届けるだけでなく、未来の担い手を育てるという視点がとても印象的でした。



そして、今回の研修で最も心に残ったのが、「伝えるだけではなく、行動変容が起こるような取り組みが必要」という言葉です。パラオは地政学的に好条件に位置しているため、日本、アメリカ、台湾など多くの国・地域から援助を受けています。しかしその一方で、健康的な食生活への意識はまだ十分とは言えず、啓発活動を行っても行動に結びつきにくいという課題があるとのことでした。そこで、特に行動変容が早い子どもたちに向けて、学校での啓発活動を積極的に行っているそうです。この姿勢の根底には、ピースウィンズ・ジャパンが掲げる「この世界にはあきらめない集団が必要だ」という理念が強く息づいていると感じました。すぐに成果が見えない状況でも、地道に、丁寧に、そして諦めずに続ける。その積み重ねが、やがて大きな変化を生むのだという確信が伝わってきました。

この考え方は、学級経営にも深く通じるものがあると感じました。人口1万8000人という小さな国だからこそ変えやすい部分があるという話でしたが、それならば30人のクラスは、工夫次第でさらに変えていけるはずです。子どもたちの行動が変わるには、ただ伝えるだけでは不十分で、日々の関わりや環境づくりが欠かせません。国際協力と学級経営。一見まったく違うようでいて、どちらも「目指す将来像を明確に持ち、行動を変える仕組みをつくる」という点では共通しています。そして何より、どちらの現場にも「諦めずに続ける姿勢」が必要です。

小さな変化でも積み重ねていけば、きっと良い未来につながるはずです。今回の学びを胸に、私自身も目の前の子どもたちと向き合いながら、あきらめずに取り組み続けたいと思いました。（所感：浦内）

○パラオ国ベラウ・エコ・グラス・スタジオ

2004年にJICAシニア海外協力隊として派遣され、現在はコロール州と契約してコンサルタントとしても活躍されている藤勝雄さんにリサイクルセンターやサーキュラーエコノミー（循環経済）について説明を受けました。同センターでは現地の方々だけで現在約70名を雇用しており安定した収入にもつながっているそうです。ここまで成長させるまでに、約20年もかかったそうです。異国の地で情熱を持って活躍されている藤さんの姿にとっても刺激を受けました。

2008年に作られた同センターでは、家庭や観光施設から出る生ゴミや紙類を活用してコンポストを製造し、有機栽培の取り組みにも挑戦していました。また、ペットボトルや空き缶、廃ビンなどを回収してリサイクルしたり、人々の環境意識を高めるため、学校でもゴミ分別の取り組みを行なっているそうです。「廃プラスチック油化事業」の取り組みでは、廃プラスチックをディーゼル油へと変換し発電、得られた電気は、センター内のガラス工房で活用しているそうです。事業を成功させるために足りない設備などは、支援してもらったり、藤さんの元技術者・経営者としての経験を活かし自ら機械や設備を作り上げたとのことでした。ゼロからモノや事業を作り上げている藤さんの情熱や実行力に心から感銘を受けました。

また、ガラス工房では回収した廃ビンを活用して、グラスやピアスなどのアクセサリ、置物などに生まれ変わっていました。パラオ産のお土産として定着し、グラス作り体験は観光でも人気だそうです。この事業の成功にあたって藤さんの理念をお伺いしたところ、「根性、諦めない」という言葉がとても印象的でした。また、「自分もリスクを背負うことで信頼を得ていく」ともお話しされており、この事業に対する決意や覚悟、思いの強さを感じました。本研修で藤さんの姿を見て、自分自身の今後の教員としての人生やパラオと多くの共通する課題を持つ沖縄の「持続可能な資源循環型社会」について深く考えさせられました。（所感：高山）



DAY4 8月6日(水)

○JICA海外協力隊ジョブシャドウイング

私たちが授業実践を行ったアルモノグイ小学校は、バベルダオブ本島の西側中央に位置し、自然に囲まれた穏やかな環境の中にありました。校舎には1年生から8年生までの児童・生徒が通っており、学年の枠を超えて子どもたち同士が仲良く過ごしている姿が印象的でした。育児休暇の期間が日本よりも短く、わずか1か月ほどしかないという話も聞きました。そのため、自分の赤ちゃんを連れて授業を行う先生の姿も見られました。

JICA海外協力隊として派遣されている永井さんは、小学校教諭として「パラオ全体の子どもの算数学力の向上」と「先生方の指導力向上」を目標に活動していました。特に四則計算の力をつけるために、ゲームを使ったアクティビティを取り入れ、子どもたちが楽しみながら算数に向き合えるよう工夫していました。言葉も文化も異なる環境の中で、子どもたちの理解度を見極めながら授業を組み立てるのは簡単なことではありません。それでも永井さんは、子どもたちの「わかった!」という瞬間を大切に、日々試行錯誤を重ねていました。その姿から、私たちが学ぶべき姿勢は本当に多いと感じました。

また、私たち自身も現地の子どもたちに向けて、沖縄の仮面やパラオの仮面との共通点、日本のアニメやオノマトペなどを紹介する授業を行いました。子どもたちは初めて聞く日本の文化に興味津々で、時には笑いながら、時には目を輝かせながら話を聞いてくれました。言語が完全に通じなくても、絵や動き、表情を使って伝えると、子どもたちは驚くほど真剣に受け止めてくれます。その姿を見て、「学びたい」「知りたい」という子どもたちの純粋な気持ちは、国境を越えても変わらないのだと強く感じました。

異なる文化の中で教育に携わる人々の姿、そして学びに向かう子どもたちのまなざしに触れたことで、教育の本質はどこにいても同じなのだと気づかされました。今回の経験は、私自身の教育観を大きく揺さぶり、これからの学級づくりや授業づくりに生かしたいと思える貴重な学びとなりました。（所感：浦内）



○ローカルマーケット

パラオのローカルフード(野菜や焼き魚、果物などを使ったスイーツなど)を五感をフルに働かせて堪能しました。気候が似ていることもあり、沖縄で見かける野菜や果物も多かったです。ムーチーのような食感と味のおやつもありました。原材料はタピオカです。(写真右上)

実際ムーチーより味は薄く、自然な甘味でした。タピオカミルクティーを飲み慣れている沖縄の子たちからしたら、普段目にするタピオカの形とは大きく異なることに驚くだろうなと思いました。

ローカルマーケットでは、食べ物を売っている方、それを買いに来ている方、友人と朝のゆんたく(おしゃべり)タイムを楽しみに来ている方など、集う目的は人それぞれ異なりましたが、皆のんびりしていて沖縄から来ている私たちに対してもとてもフレンドリーでした。マーケット内での朝食後、近くのテーブルに座っている女性たちと話していましたが、会話をしていた3名中2名が沖縄・日本ルーツの方々であることが判明しました。たまたま彼女たちが読んでいた地元の新聞記事の見出しも、日本のことでした。初めて出会った私に、自分の生い立ちも色々と言ってくれました。パラオでも「いちゃりばちょーでー」(一度会えば皆兄弟)を実現することができ、お腹も心も満たされました。(所感：具志堅)



○シニアシチズンセンター

私たちが滞在しているホテルのすぐ向かいにあったのがシニアシチズンセンターでした。日中はシニアの方々が集って体を動かしたり各々好きな活動をしたりと、とてものんびりしている様子でした。日本でいうとデイサービスセンターのようなところでした。

ムーミーのようなカラフルな服を身にまとい、伝統ネックレス(ウドウド)をつけている女性の方たちが多く、花札を楽しんでいたグループに混じって他愛ない話をしていました。花札も日本から来た文化ですが、花札のルールを何ひとつ知らない私に慣れた手つきで教えてくれた方もいました。残念ながらこの日は沖縄にルーツのある利用者の方はいませんでした。日本の歌を歌ってくれたり、シニアシチズンセンターに通所されている方々のピースフルな日常を垣間見ることができました。

この施設に週1程度で訪問している、JICA海外協力隊の小松さんは、体のストレッチをパラオ語で解説しながらリズムカルに教えていました。

前半は英語だったものの、途中からパラオ語に切り替えて体操をしていると、シニアの方たちがそれまで以上に笑顔になり、より一層和やかな雰囲気になりました。大国に翻弄されてきたパラオ社会の中で、必死に逞しく生きてきたであろう彼らの姿が、うちなーんちゅの先輩方と重なって見えました。

(所感：具志堅)



○パラオ高校

私たちは、日本語を学習している高校1年生と交流しました。最初に、校長先生からパラオの教育事情についてお話を伺いました。その内容には、沖縄と共通する課題がいくつもあり、驚きと共に親近感を覚えました。

まず1つ目は、若者の流出です。パラオには短期大学までしかなく、多くの生徒がグアムやハワイなど国外の大学へ進学します。パラオでも4年制大学の設置を試みたものの、生徒数や規定などの条件が厳しく、実現には至っていないようです。そのため、国外への大学進学後は雇用条件の良いアメリカなどでそのまま就職する若者が多く、人材流出が大きな課題となっています。多くの離島を抱え、高校や大学がない地域が存在する沖縄県の状況と重なる部分が多いと感じました。

2つ目は教員不足です。実際に私がジョブシャドウで訪れたアルモノグイ小学校でも、休暇を取る余裕もなく、少ない教員で教室や学校運営を担っていました。教員不足の背景には、給与の低さなどの待遇面の課題があるそうです。

3つ目はスマホ依存です。パラオ高校では95%の生徒がスマホを所持しており、依存やトラブルへの懸念が高まっているとのことでした。日本でもスマホをめぐる問題は深刻化しており、学校現場が抱える課題は国を越えて共通しているのだと実感しました。

校長先生のお話の後は、沖縄紹介クイズを通して高校生たちと交流を深めました。答えるたびに笑いや驚きの声が上がリ、会場全体が一体感に包まれました。パラオの高校生たちも積極的に参加してくれて、とても温かい雰囲気でした。またパラオの高校生も日本のアニメをよく見ているようで、日本文化が遠い国でも親しまれていることを誇らしく感じました。（所感：浦内）



○在パラオ日本国大使館

パラオ日本国大使館を訪問した際、小野参事官と面会する貴重な機会をいただき、日本とパラオの関係をはじめ、教育・社会・歴史など幅広いテーマについて意見交換を行うことができました。短い時間ではありましたが、パラオという国をより深く理解するための大きな学びとなりました。

まず、小野参事官が懸念していたのは「日本人のパラオに対する認知の低さ」でした。パラオは日本と深い歴史的つながりを持ちながらも、日本国内での知名度は決して高くありません。観光地としてのイメージはあっても、歴史や文化、現代の課題について知る日本人は多くないという現状があるそうです。そのため、相互理解を深めるための情報発信が今後ますます重要になるのではないかと思います。

次に挙げられた課題は、若者の流出です。パラオの人々が家族を非常に大切にしている文化を持っている一方で、「出る杭は打たれる」ような空気があり、上を目指したい若者ほど国内で肩身の狭い思いをする状況があるのではないかと指摘していました。

また、日本の委任統治時代についても話が及びました。パラオは「親日国」として語られることが多いですが、当時の教育現場では体罰が行われるなど、決して良いことばかりではなかったという現実があります。厳しい日本式教育に耐えた世代がいたこと、そしてその経験が現在のパラオ社会にどのように影響しているのかを考える必要があると感じました。

今回の大使館訪問を通して、私は「この10日間でパラオを知った気になってはいけない」という思いを強く抱きました。現地で見えた景色や人々の温かさ、学んだ知識だけで理解したつもりになるのではなく、その背景にある歴史や文化、社会の構造を丁寧に知ろうとする姿勢が必要だと感じました。パラオと日本の関係は深く、そして複雑です。その複雑さを理解しようとするこそが、国際理解の第一歩なのだと思います。今回の経験は、私自身の視野を大きく広げてくれました。（所感：浦内）



○日本地雷処理を支援する会 (JMAS)

日本から遠く離れたパラオ共和国において、旧日本軍やアメリカ軍が残した戦争の痕跡である海の中の爆弾や爆雷を除去する活動に取り組んでいる団体がありました。それが、日本地雷処理を支援する会 (JMAS) です。今回、そのパラオ代表である島田正登さんに講話をしていただきました。

JMASでは、パラオにおいて「ヘルメット・レック」と呼ばれる沈没した旧日本軍の補給船から遺棄された爆雷の回収を主な活動の一つとして行っており、2012年から活動を続けてきた結果、現在は船内に残る500発近い数の爆雷をすべて回収し終えたとのことでした。十年以上にわたり、危険と隣り合わせの作業を忍耐強く続けてこられたことに深い感銘を受けたと同時に、なぜそこまで活動を続けることができたのかという疑問も湧きました。

私は当初、日本の戦争にパラオを巻き込んでしまったことへの責任感が原動力なのではないかと考えていました。しかし島田さんは、その思いも一部にはあるものの、それだけではないと語ってくださいました。講話の中で、「戦争は終戦すれば終わりではない。八十年前の戦争であっても、その後処理はいまだに終わっていない。しかし、誰かがやらなければならない。これからの世代には、仮に戦争が起こった場合、その後何が起きるのかをしっかりと知ってほしい」という言葉を語ってくださいました。その言葉が私の心に強く残っています。

「戦争は、終戦しても終わらない」という島田さんの言葉は、私の平和教育に対する考え方を、より深く見つめ直すきっかけとなりました。戦争の悲惨さだけでなく、その後も続く現実や責任について伝えていくことの重要性を、改めて実感することができました。(所感：富山)



○環境配慮型交通システム整備プロジェクト

パラオ国内の移動手段はほとんど自家用車に依存しており、排出ガス削減の観点や、原油価格高騰による国民の負担を軽減するためにも、公共交通機関を整備し利用を促進していく必要があります。JICAがパラオ政府と協力して取り組んでいる環境配慮型交通システム整備プロジェクトは、2024年から公共バスの運行を開始し、乗車金額は1回たったの1~2ドル(学生は無料)、1日の平均乗車人数は20名と少しずつ利用者が増えてきているとのことでした。

この公共バスを導入するにあたり、「那覇や宮古のバス会社の取り組みも参考にしている」ということを聞いた私は驚きました。私は宮古島に住んでおり公共バスを利用すると、地元の方々から「私は宮古でバスに乗ったことないよ。観光客みただね。」「家からバス停までそもそも遠いから乗ろうとは思わない。」などと言われ、公共交通機関への関心の薄さを感じているからです。パラオだけでなく、沖縄県内も同じ課題を抱えていると思わずにはいられませんでした。

パラオの方々に公共バスの便利さや価値の理解を促すために学校の授業で取り上げたり、バスの信頼性を高めるため「丁寧に停車、時間通りで安全に運行」ができるようにドライバー育成したり、日本の技術者たちがパラオの人々に歩み寄りながら奮闘していることを知ることができました。「ナイトマーケットに行きやすくなった。」「車を持たなくても買い物にいけるようになった。」という声もあることから、観光客だけでなく地元の方々も使いやすい公共交通機関として発展し、いずれは日本の支援がなくても運用できるようになっていくことを願います。(所感：恩納)



○パラオ国 太陽光蓄充電システム、電気自動車を活用した脱炭素交通モデル普及・実証・ビジネス化事業

持続可能な観光開発を目指した取り組みについて、T-PLANの吉岡さんにお話を伺いました。既に大分県で実用化されているこの「姫島モデル」は、CO2を排出しない電気自動車を利用した環境に優しい観光交通システムとして注目されています。公共交通機関が未発達で、沖縄県と同じ車社会であるパラオでも観光客向けに実用できないか、これから実証実験が行われるとのことでした。

宿泊施設が多く立ち並ぶメインストリートに太陽光蓄電のスタンドを設置することで観光客が利用しやすい点や、新エネルギー技術を現地の人に共有できるという点はいいことだと感じました。また、この自動車を使ってパラオの伝統文化が残る地方部まで観光客の足が向けば、よりパラオの良さを知るきっかけになるのではと感じました。

複数の国からの支援で成り立つインフラならではの課題で、電気の規格などが統一されていないことの不便さ、専門的な技術者が不足していることなど、このシステムを導入するにあたって様々な苦悩があることを話してくださいました。

「ソーラーパネルや自動車の使用可能年数が終了した際に、今のパラオ国内では、この産業廃棄物を処理することは難しい。処理する場合はどうするのか。」と疑問が浮かび、吉岡さんに尋ねると、「パラオだけではその問題は解決できない。1つの国では解決できないことから、他国と協力するパートナーシップが大切。」と教えてくださいました。新しい技術をただ取り入れるだけではなく、作る責任、使う責任を考えながら支援や技術投資をしていく必要性を学ぶことができました。（所感：恩納）



DAY7 8月9日(土)

○ホームビジット

2つのグループに分かれてホームビジットをさせていただきました。私たち4名の教員が行った先はアイメリーク州で、滞在先のコロール州とは異なり自然が豊かな農村部でした。迎え入れてくれたアイメリーク小学校勤務のハーソン先生は、お家までの道中もカモサンドックやアイメリーク小学校に立ち寄りでは、1つ1つの場所や学校施設について詳しく話してくれました。学校校舎の裏側では自分たちで野菜を育てていて、そろそろ収穫して新しい種類を生徒と一緒に植える予定だと仰っていました。到着したホームでは、すでにハーソン先生のご家族や同僚の方々が料理の準備をしていました。私たちに伝えたいことや見せたいものが多いハーソン先生は、自分のタロ芋畑を見せてくれたり、椰子の実の剥がし方やココナッツの実の削り方を実演して見せてくれました。そしてそれを自分の甥っ子や学校の生徒たちにもさせていて、パラオの伝統的な生活やその中で生まれる知恵を次世代へ直接継承している姿を間近に見ることができました。パラオ独自の文化や生活様式をととても大事にしており、それを次世代まで確実に引き継いでいきたいという熱い思いが強く伝わりました。パラオの外で活躍するにはもちろん英語習得も必要ではあるものの、移り変わりの激しい世界で、自分のアイデンティティを大事に持つためにも、生徒たちにはパラオ語をしっかり話せて欲しいということも仰っており、学校のカリキュラムにもパラオ語の授業が組み込まれているそうです。頭も体もパラオ語に浸らせるために、パラオ語の授業で使用する教室は全てパラオ語表記になっていました。ハーソン先生は教職に携わる傍ら、独自でエコビジネスも展開、同コミュニティのリーダー的存在でもあり地域の行事ごとにも中心になって運営・実行しているそうです。ハーソン先生自身のバイタリティに終始感動したと同時に、パラオへの愛や自分が属する地域の自然や人々を愛するその姿勢から、多くのことを学んだ1日でした。（所感：具志堅）



○ペリリュー島

船に乗ってパラオ諸島南西部に位置するペリリュー島を訪れました。ペリリュー島は、太平洋戦争時に日本軍とアメリカ軍が激しく激突した地です。現地ツアーガイドの平野雅人氏の案内のもと、島内に残る数々の戦跡を巡りました。

ペリリュー島の戦いでは、日本兵の自決が認められておらず、沖縄戦で学んできた集団自決とは異なり、終わりの見えない過酷な持久戦が続いていたことを知りました。戦力差は圧倒的で、島内に遺棄された両軍の戦車を比較すると、その大きさには二倍近い差があり、内部に見える装甲の厚さも比べものにならないほどでした。

これらの実物を前にし、日本軍が置かれていた状況の厳しさを強く実感しました。また当日は、私たち以外にもペリリュー島のツアーに参加している方々の姿が見られました。参加者は日本人だけでなく、海外の方々も含まれていました。

その様子を見て、それぞれがどのような思いを抱きながらこの地を巡っているのか、大変気になりました。日本人である私たちが感じる視点と、他国の立場から見た視点とでは、戦争の捉え方もおそらく異なっていたのではないかと感じました。

沖縄県民であれば、沖縄戦を知らない人はいないと言っても過言ではありません。しかし、その沖縄戦の前段階として、沖縄を守ることにもつながっていたペリリュー島の戦いを、このツアーに参加するまで私は全く知りませんでした。その事実に強い恥ずかしさを覚えました。

これまで沖縄戦の悲惨さに重点を置いて行ってきた自らの平和教育は、本当に真の平和に繋がっていたのだろうかという疑問が湧きました。沖縄の戦争、日本の戦争、そしてパラオの戦争という「内」の歴史を学び、さらに海の外で起きた戦争に目を向けたことで、一つの問いが浮かび上がりました。

それは、戦争の悲惨さを伝えるだけの教育ではなく、世界と手を取り合い、支え合って生きていく平和な社会を実現するための教育こそが、現代教育に求められているのではないかという問いです。

本研修を通して、その必要性を強く感じることができました。(所感：富山)



○シャコ貝センター(PMDC: パラオ海洋養殖普及センター)

パラオに着くと自然豊かで海がとても綺麗で、沖縄と似ているなとどこか懐かしい感じがしました。そんなパラオの経済自立に向けて、持続的海洋水産資源利用アドバイザーを務めている與世田兼三さんは、現在水産事業ビジネスモデルの構築に取り組んでいます。與世田さんは沖縄県出身で、2017年からパラオで活動をしているとのことでした。

パラオは海に囲まれており、豊富な漁場が広がっていますが、水産業は島内消費が中心となっているようです。また、伝統的に環境保護の意識が強く、16州が独自で水域の保護区を持っているため自由に漁ができず、本格的な組合としての漁業活動も今後の課題の一つとのことでした。さらに観光客の増加に伴い、天然のシャコ貝が枯渇の危機に瀕したことで、パラオ政府が天然シャコ貝の採取を禁止し、食用シャコ貝は養殖物に限定されているそうです。シャコ貝センターでは国内で唯一、シャコ貝の種苗生産を行っており、気候の影響もあってその成長は日本よりも数年早いそうです。センターでは他に、ナマコなどの養殖も試みているとのことでした。持続可能な資源開発の課題や取り組みについても、パラオと沖縄は似ている所があると感じました。

2022年にパラオは沖縄県と友好関係の強化に関する覚書を結び、様々な分野での協力関係も築きつつあります。パラオでは港の着工も計画されており、水産資源ビジネスモデルの構築に向けた専門家同士との協力関係だけでなく、未来を担うパラオと沖縄県子ども達が交流できる取り組みも盛んになり、共に協力しながら課題を解決したり、お互いが恩恵を受けられるような関係が築けると感じました。(所感：高山)



○パラオ上院議員(沖縄県系人)との意見交換

今回の滞在中、パラオ共和国の上院議員であるエルデベエル氏との懇談会という貴重な機会をいただきました。エルデベエル氏は日本にルーツを持つ方で、祖父が沖縄県名護市の出身であることをお話ししてくださいました。

私も隣に座らせていただき、直接会話を交わす機会がありましたが、初対面でありながら、まるで親戚の方と話しているかのような不思議な親近感を覚えました。

意見交換の場は、教師海外研修の終盤に差しかかっていたこともあり、メンバー全員がパラオ共和国という国の魅力や課題を、より具体的に捉えられるようになっていました。そのため質問が尽きる事のない、非常に充実した懇談会となりました。その中でも特に心に残った内容が、若者の流出という社会課題についてのお話です。私は昨年度まで西表島で勤務していましたが、離島やへき地が抱える課題と、パラオ共和国が直面している課題が、驚くほど共通していることに気づかされました。それは、ふるさとを離れた若者が戻らず、人口流出が続いているという現状です。豊かな自然や温かい人々、歴史ある文化など、多くの魅力を持つ「ふるさと」である一方、若者が専門的に学べる教育機関が限られていること、選択できる職業の幅が狭いこと、さらに国外や都市部への移住を後押しする制度が整っていることなど、結果として帰郷を難しくする条件も重なっている現状があることを知りました。

エルデベエル氏も、こうした課題を十分に認識されており、教育の充実や魅力ある地域づくりに向けて尽力している一方で、出口の見えない将来への不安についても率直に語ってくださいました。その言葉から、課題の重さと同時に、責任ある立場として真摯に向き合い続ける苦悩が伝わってきました。私自身、その姿勢に強い共感を覚えるとともに、深い尊敬の念を抱きました。

国の中枢で政策決定に関わる立場の方から、このように率直に生の声を聞かせていただけた貴重な機会に、心から感謝しています。(所感：富山)



2-4 事後研修

第1回 8月18日(月) 10:00-16:00 @JICA沖縄センター

主なプログラム	1.海外研修振り返り(私のベスト写真3枚) 2.教育庁報告会役割分担 3.国際理解ワークショップ教材作成テーマ決め
目的	①海外研修の振り返り ②教育庁帰国報告会準備 ③ワークショップ案の作成

海外研修で特に印象に残った場面の写真を1人3枚選び、それをメンバーに共有しながらパラオ研修の振り返りを行った。パラオ帰国後間もない事後研修であったので、印象に残ったことを言語化するうちに、それぞれ自然・人々・文化・教育・産業・平和など興味関心の高いテーマが定まりつつあり、教育庁での報告会やワークショップ作成もそのテーマに準じた役割分担で準備を進める事となった。



教育長表敬訪問・帰国報告会 8月22日(金) 10:00-11:45 @沖縄県庁

報告会では、教育庁関係者及び新聞記者など20名以上が集まり、熱気と緊張感を帯びながらの開始となった。教師海外研修参加者は6つのテーマ(自然・人々・文化・教育・産業・平和)に沿ってスライドを用いながら発表した。戦前からの沖縄との繋がりや自然を大事にしながら観光産業とのバランスをとっている共通点、そしてパラオ側から見た太平洋戦争などの学びを報告し、その経験をどのようにして学校現場に還元していくかを伝えた。その後の質疑応答では現地の食などの文化についてや、パラオと沖縄の繋がりなどについて質問があった。

教育長への表敬訪問では、半嶺教育長から「報告会での先生方の報告が素晴らしかった。その経験を沖縄の子どもたちにぜひ伝えて欲しい」との言葉を頂いた。参加者でお揃いのパラオポロシャツを着ており、そのデザインから沖縄との共通点の話題となったり、教員を目指す大学生にもパラオの経験を伝えるアイデアなどが出された。



JICAフェスティバルでは、パラオで学んだ事を6つのテーマ（自然・人々・文化・教育・産業・平和）に分けて掲示物を作成し、パネル展示を行いながら、来場者にパラオの紹介や教師海外研修の魅力を伝えた。



過年度の教師海外研修の参加者や、大洋州のJICA研修員などもブースを訪れ、パラオと沖縄の共通点や、今も現地に残る日本語などの話題で盛り上がっていた。100名以上のブース来場者があった。

また、沖縄県の事業で平和学習の一環でパラオへ派遣された高校生たちもブース出展しており、互いに学んだ事を紹介したり、共通の経験を見つける事でパラオと沖縄の架け橋となる人的ネットワークが繋がっていく様子が見られた。その他にもJICA海外協力隊のオンライン中継やJICA研修員の民族衣装&ダンスなどを見て、開発教育や国際理解教育の大切さや楽しさを体験することが出来たと参加教員から発言があった。

第2回 12月13日（土） 10:00-17:00 @JICA沖縄センター

主なプログラム	1.実践ワークショップの発表と振り返り 2.成果報告会の準備
目的	①各所属校で実践したワークショップの成果と課題を報告しあう。 ②実践結果からワークショップをブラッシュアップする。

パラオから帰国後の9月～12月の間、各所属校で自らが作成したワークショップの授業実践を行った。その内容を第2回の事後研修で各自紹介し、振り返りとしてKPT手法（Keep、Problem、Try）を使って項目毎に洗い出し、発表者以外からのフィードバックを行った。

パラオで体験した事をそれぞれの校種・教科に合わせて教材を作成していたが、開発教育の要素でもある「答えのない問い」や正解を教えるだけではない＝生徒自身の考えや議論することに重きを置く授業展開にそれぞれ難しさを感じた様子であった。参加メンバーからアドバイスをもらったり、改善策を話し合う事で教材づくりのブラッシュアップに繋がった。

教師海外研修 成果報告会 1月17日（土） 10:00-12:30 @JICA沖縄センター

第2回事後研修にて各自教材のブラッシュアップを行い、1月の成果報告会にてパラオ派遣から授業実践までの一連の研修内容を発表した。対面・オンラインで合計18名の参加があった。パラオで経験したことを所属校の生徒たちに伝えるために工夫した点や、改善点なども発表し、宮里志織教諭は実際に行ったワークショップ（ストーリーボード）を短縮版にして実践した。自分の人生や体験を振り返り、自由な表現方法（文字、色使い）で1枚の絵を作成していく作業は来場者にも好評で、開発教育の手法を取り入れた教材の良い事例となった。沖縄パラオ友の会の方の参加もあり、沖縄とパラオの架け橋となる人をこれからも育てていきたいとコメントがあった。



2-5 研修を終えて

「自分自身が楽しみながら探究し学び続けたい。なるべく自分の目で見て感じることを大事にしたい。」日々、理科の授業をしながら私が目標にしていることです。JICA海外協力隊の経験を持つ同僚から話を聞き、英語が苦手な私にはハードルが高いと思いながらもJICAの指導者養成講座に参加し始めました。そこで学んだのは、様々な手法を使った学び方があったことや、他者と関わりながら多角的な視点に立って物事を考えることの面白さでした。このような体験を生徒たちへ届けられるような授業をしたいと思い、今年、念願が叶い本研修に参加することができました。

パラオでの9日間は私の許容量を超えるほどの学びと衝撃の連続でした。パラオの凧の海やほとんど手つかず森を目の前にして地球が作り出す自然の美しさに息をのみました。パラオの国のために強い情熱をもって活動している日本人や現地の方々の言葉一つ一つが心に響き、ホームビジットではパラオの方々の真心と自然と調和した生活の豊かさ

にふれることができました。特に忘れられないのはペリリュー島に足を運んだ8月10日。

沖縄戦とは違った角度から第二次世界大戦を見て自分の無知さを恥じました。帰国後は、台湾やフィリピンの戦争関連の文献を読み、「物事を一つの角度から見ただけで知った気になってはいけない」ということを心に刻みしました。

本研修を経て「私が生徒たちに伝えられることは何だろう」と自分に問い続け、これからも学びを止めずに広い視野で情報をキャッチし、考えることを大切にしていこうと思います。本研修参加へのチャンスをくださったJICA・JOCAスタッフはじめ、背中を押してくださった平良中の先生方に感謝。「迷ったらTRY!」といつも前向きでたくさんの学びを共有してくれた「パラオキナワ」メンバーとの出会いと充実した日々感謝。本当にありがとうございました。



恩納唯

海外とは無縁だと思っていました。英語は得意ではないし、移動中に同じ場所に長く座り続けることを想像するだけで、気が滅入ります。そんな私が教師海外派遣研修に応募したことは、これまでの自分から考えれば明らかに型破りな行為でした。日本から、そして自分自身から一歩外へ踏み出した私は、多様な背景をもつ仲間と出会い、笑い、泣き、戸惑い、それらを持ち寄って対話し、同じ時間を過ごしました。その中で、常に意識してきた「多角的に物事を見る」という姿勢が、頭の理解にとどまらず、身体的な感覚を伴って、確かに目の前に立ち現れました。自分の足で世界を体験することの大切さを、心と身体の両方で実感した九日間でした。また、パラオ共和国に滞在している間、そこかしこに沖縄の、八重山の残像がちらつき、パラオにいな

がら、常に沖縄を、八重山を感じていました。そして沖縄に帰ると、今度はふとした瞬間にパラオの記憶がよみがえります。木々の隙間からこぼれる日の光。雨の後の澄んだ空気を、肺いっぱい吸い込む幸せを。

私たちを祝福するかのように架かる大きな虹。ペリリュー島へ向かう船の上で見た、鏡のように静かな海。挙げればきりがありません。日々の業務という荒波に飲み込まれながらも、ふと心に浮かぶのは、仲間たちと共に見たパラオの風景です。帰国後、叔母たちから、亡くなった祖母がかつてパラオに住んでいたこと、生前、何度も「もう一度パラオに行きたい」とこぼしていたことを聞きました。その瞬間、私の中でパラオは、過去と現在、個人と家族、そして沖縄と静かにつながり、今もなお続いている場所となりました。パラオは、つながり、続いていく。どこまでも。

最後に、「パラオキナワ」のメンバー、JICA沖縄、JOCA、JICAパラオ、そしてパラオで出会ったすべての方々へ。今回の旅で出会えたすべての人と時間に、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



宮里志織

校務の関係で過去2年、応募さえもできななかった教師海外研修 in パラオ。ありったけの思いを胸に、3年越しにやっと実現することができました。9日間の現地での研修があっという間に感じてしまうほど、パラオで学んだ日々は濃厚でした。最初のパラオフリーティングからエコツアー、ジョブシャドウ、ホームビジット、とその他様々な研修先を回り、各々の分野で活躍されている方々との対話から、パラオ共和国が直面している課題を直に学ぶことができました。それと同時に、決してその課題や課題が与える影響というものは他人事ではないこと、同じ島（島国）である沖縄や日本も直面しつつあることを身をもって実感しました。日本や台湾をはじめとする国々の支援で作られた公共施設やインフラなどを見かけたり、大国による委任統治の歴史から独立してまだ32年ということを見ると、国際社会での存在感を出しながらパラオ共和国として今後もさらに発展し続けていくのだろうという感じがしました。しかしその一方で、止まらない人口流出の現状を目の当たりにすると、パラオは今後どうなるだろう、各州のチーフたちはどのようにしてその地域の伝統や文化を継承していくのだろう、当事者であるパラオ島民はこの問題に対してどう感じているのだろうと思いました。

パラオで学んだことをどのように授業としてカタチにしていくかを考えるのは予想以上にとても難しかったです。宮古島勤務 最後の年、大好きな宮古島の生徒たちに何を1番伝えたい？どのようにしたら、パラオで起きていることを当事者意識を持って捉えてくれるだろう？と自問自答を何度も繰り返しました。パラオでの研修を通して得た学びと経験は、今後も様々な教育の場で活かしていきたいと思っています。

今年度教師海外研修に参加するにあたり、多大なサポートをし続けて下さったJICA沖縄、JOCA沖縄の職員の方々、パラオでの研修中に出会った全ての方々、そして研修を通して一緒に学びを深めたチーム「パラオキナワ」のメンバー1人1人に感謝しております。本当にありがとうございました。Sulang! いっぺーにふえーでーびたん♡



具志堅優美子

教員四年目のこの夏、経年研のない年だからこそ「新しい学びに挑戦したい」と思い、パラオでの研修に参加しました。JICAでの指導養成講座では様々なテクニックと知識を学ぶことができました。9日間のパラオ滞在はまさに「百聞は一見にしかず」を体感する連続で、自然や人々、文化に触れる中で、自然・人・文化があってこそ教育が成り立ち、教育があるからこそそれらが守られ育つという循環に気付かされました。現地では小学校や高校を訪問し授業を行い、校長先生から課題についてもお話を伺いました。小学校では日本や沖縄の紹介に子どもたちが興味津々で、国が違っても「知りたい」「学びたい」という探究心は共通だと実感しました。一方で、高校ではスマホ依存や若者流出、教員不足といった課題が語られ、沖縄の現状とも重なり、異国で学ぶ日々は同時に沖縄を見つめ直す時間にもなりました。帰国してからは、この学びを自分の中でどのように整理し、

何を伝えるべきか、どのように伝えていくべきか、そして今後の授業実践にどう活かしていくかを考え続けています。とはいえ、この悩みは苦しいものではなく、むしろ前向きで楽しい悩みです。今回の経験を振り返りながらこれからも子どもたちと一緒に学び続けたいと思っています。

最後に、研修を支えてくださったJICA沖縄、JOCA沖縄の皆様、パラオで出会った方々、そして共に学んだチーム・「パラオキナワ」に心から感謝します。6月から続いたこの研修で得た出会いは、私にとってかけがえのない宝物です。

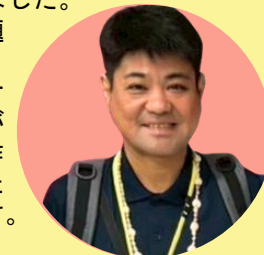


浦内 桜

私は、実際に自分が体験しながら国際理解を深め「教師としての実践力を高めたい、自分の価値観を広げたい」という思いで今回この教師海外研修に応募しました。応募条件に年齢上限や管理者からの後押しがあったことも応募の動機につながりました。また、約半年間の研修を通して様々な方と出会い、繋がり、色々な視点や価値観に触れることで自分自身の成長にも繋げたいと思いました。

パラオでの9日間の研修は多くの学びと気づきの連続、そして複雑な気持ちなどの葛藤もありました。パラオは自然豊かで、気候や植生なども沖縄ととても似ている国でした。観光資源は豊富だが、伝統的に環境保護の意識が強く、観光開発は積極的に行えていないという部分は先進国の観光開発と大きく異なる点だと感じました。パラオはIMFの所得分類では高所得国となっており、実際に人々の生活も豊かそうで食糧や生活品をはじめ何でも揃っており、暮らしに困っている様子は感じられませんでした。それはアメリカや他国の財政支援などで成り立っていることを研修の中で学びました。パラオが「援助慣れ」しており、多くの人々が将来のパラオへの危機感を感じていない状況についても研修の中で知り、パラオの存続性について不安を感じました。

しかし、人口の流出や文化継承、持続可能な観光開発などの課題は沖縄にも共通する課題でした。今回の研修で学んだことをワークショップに生かし授業の中で生徒達に自分ごととして考えさせ、それぞれが自分なりの答えを出すことを意識しました。生徒達はパラオについてものすごく興味を持ってくれました。パラオの魅力が数多くあったり、テーマが広くなり過ぎてしまったり、私自身が授業の焦点化を上手くできていなかったりと授業作りではとても苦戦しました。授業を作って実践してはまた作り直しと大変ではありましたが、生徒達に還元できるよう、今後も自分自身が学び続けながら授業実践を続けています。研修でサポートしていただいた、「パラオキナワ」のメンバーやJICA・JOCAスタッフの皆様、現地の関係者の皆様に本当に感謝しています。本当にありがとうございました。



高山 博明

私は沖縄が好きで、沖縄に生まれ育ったことに誇りを持っています。一方で、沖縄以外の土地で暮らした経験がなく、ましてや海外を訪れたこともありませんでした。沖縄の良さを語りながら、外の世界を知らないままでよいのだろうかという思いが、心のどこかにありました。海外に出たことがないことは、私にとって一種のコンプレックスでもありました。そうした自分を変えたいという思いが、今回の教師海外研修に応募した原動力でした。

12日間にわたる研修では、現地の人々との交流や、小学生・高校生との交流、観光地やマーケットの訪問など、人生で初めての経験に満ちた日々を過ごしました。毎日が新鮮で、時間があっという間に過ぎていくほど充実した研修でした。一方で、パラオ共和国が抱える社会課題や、解決の糸口が見えにくい現実にも向き合うことになりました。

本研修を通して、特に深く考えさせられた問いが「支援とは何か」ということです。パラオは各国から経済的・技術的支援を受けている国ですが、現地で暮らす人々は、決して不幸そうには見えず、むしろ今の生活に満足し、穏やかに暮らしているように感じられました。その中でJICA職員や支援団体の方々が、「何が今できるのか」「何を残せるのか」と葛藤しながら活動している姿が、非常に印象的でした。

今回の研修で出会った方々を見ていて私なりに出した答えとして「支援」とは、与える側が正しさを押し付けるのではなく、その国の価値観や生き方に寄り添い、ともに考え続けることこそが「支援」なのではないかと感じました。異国の地で現地の人々と生活を共にし、時に衝突しながらも、その国の未来のために活動を続ける方々の姿に、深い尊敬と畏敬の念を抱きました。

結びに、本研修の実施にあたり多大な支援をしてくださったJICA沖縄の皆様、JOCA沖縄の皆様、パラオで温かく受け入れてくださった現地の方々、異国の地で献身的に活動されているJICA海外協力隊の皆様、そして共に学び、切磋琢磨してきた「パラオキナワ」の仲間たちに、心から感謝申し上げます。今回の研修で得た最大の財産は、人との出会いです。このご縁に感謝し、今後の教育実践に生かしていきたいと考えています。



富山 嘉孝